

発掘! さわめびと



「ドラムサークル」のファシリテーター（ガイド役）として、全国を飛び回る音楽人。



とりかわひとみ さん
鳥川 仁美 さん

1978年佐久穂町生まれ。小学校でトランペットに出会い、中・高と吹奏楽部に所属し、クラリネット、打楽器に親しむ。大学で栄養学を学んだ後、20代後半に郷里に戻り、会社員をしながら佐久市消防団音楽隊で打楽器を担当。「元々分析好きで、「源流」をたどっていく作業が好きで、どうしたら人間同士もっと交流できるか」を考えている時に、「ドラムサークル」に出会い、その魅力の虜に。家族は両親と兄の4人。海瀬在住。

「レシピに沿って作る料理が楽譜のある音楽とするなら、その日の冷蔵庫にあるもので作るのがドラムサークル。私たちの仕事は、それを最高の料理にもっていくこと」

れるじゃん！ って」

「ドラムサークル」とは、文字通りドラムなどの打楽器を使った即興演奏のこと。参加者は輪になって様々な種類の打楽器を用いてアンサンブルを作り上げていく。自由に奏でるリズムによって参加者は心の扉を開き、その結果自己の気づき、創造性、協調性などが育まれ、参加者間のつながりやコミュニケーションも強化されるといふ。そして、「ドラムサークル」の最大の特徴は楽譜がないこと。仁美さんが「ドラムサークル」に魅せられた理由の一つもそれだった。

「楽譜がないから練習しなくていいし、いきなり音楽ができる」と仁美さん。「それも誰かに聴かせるための音楽ではなくて、参加者それぞれが自分のリズムを奏でるだけ。あ、これなら誰とでも音楽で心を通わせら

仁美さんが「ドラムサークル」に出会ったのは五年ほど前。当時考えていたことが三つあった。その一つが「人間同士、どうしたらもっと交流ができるか」

自立したコミュニケーションをつくるにはどうすればいいか。「もし町民が皆知り合っていたら何が起きるか。例えば、買物に行きたいというおばあちゃんがいいたら、そこまで車で行くから乗ってく？ ということが可能だろうし、子供が夕暮れ一人で歩いている、全員が知り合

いだつたら危ないという概念も生まれにくい。気軽に協力しあえる空気が生まれるのではないかと。もう一つは、素晴らしい人がいるのに知られていないという現実。それを何とかしたかった。「震災後、自分の本当にや

いことをやりながら、まわりも幸せにしたいと考える農業移住者や、お店を出したり、素晴らしいモノ作りをする地元の人私の周囲が増えてきた。そういう素敵な人たちの思いを多くの人に知ってもらいたかった」

そして三つ目は、音楽における「温度差」。かつて佐久市消防団音楽隊に所属していた仁美さんは、聴かせる側と聴く側の間の壁を常々感じていたという。「お客さんは楽しんでいて、一緒に作っているような、同じ空間を共有しているような感覚になれるだろうか」

そんなときに知ったのが「ドラムサークル」だった。「いろいろ調べたら、私の考えていることがドラムサークルでみんな実現できることがわかった。あ、これ、やろう！ って」

「ドラムサークル」における仁美さんの役割はファシリテーターという、いわばガイド役。「私たちの仕事は、安心できる場を作って、参加者の心を開かせて、自由な表現をしやすくすること。みんなが安心して自分の音を出している時は、ファシリテーターが入る必要はないけれど、次にどうするか迷っている時に入ってゆく」

「レシピに沿って作る料理が楽譜のある音楽とするなら、その日の冷蔵庫にあるもので作るのがドラムサークル。私たちの仕事はそれをさらに最高の料理に

もっていくこと」

「ドラムサークル」の魅力は、その自由さにあるという。「演奏する技術がなくとも楽しいやりとりが誰とでもできる。あ、そうきたか、じゃ、こうするみたいなのが太鼓だから簡単にできるし、音階がないから正しい、間違いない」

企業の新人研修などでも行われるが、「配属が変わっても、仲がいい、離職率が減ったといった効果が現れる」のだという。「ドラムサークルを始めてから、自分はこういう人間だと思

い込みもなくなり、自分の在り方、信念とかも変わってきた。誰に対しても素の自分であられるからどんな楽になっ

それまでは人に対してジャッジする人だったんですけど、それもなくってきた。ハイ、寛容になりました（笑）」



ドラムサークルでは、基本的に聴衆が存在しない。「だから音楽の入り口としては一番やさしい」＝茂来館メリアホールで。2016年6月